

平成二十三年度

豊島岡女子学園中学校
入学試験問題

(一回)

国語

注意事項

- 一. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二. 問題は二から三、一ページから二十ページまであります。
合図があつたら確認してください。
- 三. 解答は、すべて指示に従って解答らんに記入してください。

一 次の一線部のカタカナを正しい漢字に直しなさい。(一画一画でいいいにはつきりと書くこと。)

- 1 公害に対する有効なホウサクを考えよう。
- 2 キセイ客が多く新幹線は満席だ。
- 3 片付いた部屋でカイテキに過ごす。

二 次の文章を読んで、後の一から十三までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

ある日、とある会合に出ました。

川の環境かんきやうに関しての話し合いで、もし汚染おせんが進み、いまよりも魚が減ったらどうするかという話題になったのです。するとこう
いう意見が出ました。

「魚が減ったら鮎あゆみたいに放流したらいいじゃないか」

おいおい。私は①身みを乗り出してしまいました。

「そんな」②「意見がありますか！」

こういう席では怒おこっちゃだめなんですが、つい、声を荒あらげてしまった。

「山崎さん、あなたは放流推進の人でしょう？ なんでそう言うのかね」

私は、いかん、この人は魚に詳しくないからそういうことを言うんだ、と思い直しました。善意の持ち主なんだろうし。

「すみません。魚のことになったらついムキになってしまいます。ずっと調査の仕事をしていた判わかったことを申し上げます」

私は慎重に言葉を選びながら説明を試みました。

川にある特定の魚を棲ませたいからといって、③放流しようとしてもうまくいかない。

それは、なぜいまその魚がいないのかという理由をクリアにしなければ、結局死滅してしまうからです。またその逆もあって、本来は持つてきちゃいけない魚を放したらどうなるか、という問題もある。生態系の乱れが危惧されます。

*アセスメントの専門家がきちんとした知識のもとに持つてきたものは、いまはある程度まで調和し、棲息していますが、実際問題として先のことは読めない。

かつて魚の遺伝子の問題などが知られていなかった頃は、琵琶湖の鮎を持つてきたりした経緯が、多摩川にもあります。多摩川に鮎がいないなら、琵琶湖の鮎を持つてくればいいじゃないか。あつち余ってるんだから、という意見が昔からあったのです。でも、そうしたらやっぱりうまく育たない。

④同じ鮎といっても、その個体には育った歴史がプログラムされているわけです。そこが合致しないと育たない。

そこでほかの流域ならどうかと青梅に移植したら、大きくなった。この鮎が普通の鮎と同じであることが証明されたんですが、それが結果的に、国内間移入種の第一号になった。

実はそのとき、いまは普通に多摩川に棲息している*オイカワなどの魚が一緒に持つて来られたという事実もあります。ああいう魚は本来、多摩川にはいなかったんです。

国内間移入種の最初の川として、文献が残っているのは多摩川ですから、間違いないでしょう。

その当時の水産界にとっては大センセーションで、⑤とてもいいことだった。

しかし、いまではそれは過ちだったということに気づいて、やめました。つまり同じ鮎ではあるが、多摩川の原種を追い込んで駆逐してしまうことがわかったのです。

こうした例は*ブラックバスや様々な問題で、河川や池や湖がボロボロになるまで、みんなわからなかった。ずっとその繰り返

しなんです。

いまで言えば、遺伝子組み換え技術を使って、除草剤に強い遺伝子を残し、その大豆だけ育てればいい。ところが耐性を持った雑草が生えてきて⑥駄目になっちゃったという例があります。

それと同じで、外来種を持ち込んだら、どうなるか。現在の*ブルーギルやブラックバスの繁殖をみるとわかります。放流には一定の節度とルールが必要で、⑦正解はまだない状況にあるのです。

こうして説明を終えました。すると、「放流すればいいじゃないか氏」は、⑧とても気持ちよく頷いてくれました。こうやって少しずつ、魚と川への理解を共有していかなくてはと、私はあらためて学んだ気がしたのでした。

私が行っている調査の一つに、川に入って水温を確かめるというものがあります。あたたかい下水処理水が流される多摩川は、⑨この10年でずいぶん温暖化しました。とても水温が高いのです。

多摩川は、昔は猛烈に冷たい川でした。中流域でもほとんど20℃くらいしかなかったでしょう。いまでも奥多摩の駅前の川の水

温は真夏でも14℃です。イワナが棲めるような水温です。かつては、それが川崎まで流れてくるのに一日かからなかった。ダムがないから水がどんどん流れてくる。つまり、あたたまる

タイミングがない。非常に水温が低い川だったんです。それが水温計を見たらほぼ倍、30℃を平気で超えている。⑩このことが問題だと気づいたのは、やはり鮎の関係からです。放流を続けていた秋、鮎は産卵しなかった。

おかしい。

川を見回すと気配すらない。

「もしかすると水温か？」

私の推理は、冬になつて的中しました。12月に鮎たちが産卵をしたからです。

昔の鮎は9月に卵を産んでいた。そうしないと、生まれた稚魚たちが川に戻るまでに水温が低すぎて死んでしまう。生まれた鮎たちが、5、6ヶ月海ですごしてから、ゴールデンウィーク頃に帰ってきていた。そのサイクルが狂ったわけです。

12月に卵を産んだ。

では遡上はいつになるんだ？

その答えは3月でした。

ということとはつまり、海で大きく育つ前に川に帰ってくることになります。

昔はある程度大きくなつてから帰ってきたので、かなりの激流でも上ることができた。「あーいまは水温変化によって体格が小さいまま、ダムや激流を上ろうとする。だけど、魚に力がないから上れないんです。

海からの遡上鮎は、全部*堰をとつばらつても、上って行かないんじゃないかという説があります。

「いー小柄になった鮎たちは、*登戸のダムでほとんど止まっています。そうすると、それ以上上らなくてもいいという情報をもった鮎ばかりになってくる。

それが繰り返されるから小さい鮎ばかりになってきている。これが生物学的にいう「スクリーニング」です。

上流に上って大きくなるやつも、少しはいる。でもこれは魚道を下れない。

「うー、いちばん大きな鮎は上流に上るだけ上らされて、下りることができないから、大鮎の遺伝子は残せない。鮎は下流で卵を産みますから。これが大きな問題として立ちはだかっているのです。

それで魚道を造つてあげなくては、いつまでも大型の鮎が育たないということになった。まずは、いま大きいやつをなんとかしなければと思いました。従来の魚道は、

「川を上れないと魚がかわいそうだから、⑩と⑪にかく上らせてあげようよ」

という発想です。

でも、鮎を追いかけていてわかったことは、屋根を直す職人さんが屋根にのぼって、仕事が終わったら梯子がない、という状況だったわけです。

私は国土交通省の役人に訴えました。

「本来なら下りるための魚道もなきゃいけないし、それは簡単に造れるはず。滑り台でいいんですから」

「まあ、そうですね」役人は慎重です。

「小ぶりの大人鮎だと卵が2000粒ぐらいしかない。通常は5万粒ぐらい。鮎が上ったといつてみんな喜んでるけど、そいつが帰ってきて卵を産まなきゃ駄目だということが情報として欠落していますよ。鮎に片道切符だけ渡しても、しょうがないでしょう？」

「山崎さん、それは分かりますが、そういった魚道を整備するには国だけではなく自治体にも理解をしてもらわないといけない。それに金もかかりますしね」

賛意は示してくれても、国単位では動かない様子でした。私も一回ぐらいの提案じゃダメだとわかっています。「うん。大変だもんね、だけどそれを知って、俺はずうつと言いつけるから。それが仕事だから」笑って彼らに言葉を返します。私は言い続けて、⑫言い続けてなんとか動かそうと思っています。持久戦です。

(『いのちの川』 山崎 充哲)

〔注〕 * アセスメントⅡ評価。ここでは、自然への影響を事前に予測すること。 * オイカワⅡコイ科の淡水魚。

* ブラックバスⅡ外来の魚の一種。

* ブルーギルⅡ外来の魚の一種。

* 堰Ⅱ水流をせきとめるための仕切り。

* 登戸Ⅱ地名。

問一 ―線①「身を乗り出してしまいました」とありますが、「身を乗り出す」とはどういう意味ですか。最も適当なものを次のア
イの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 深い考えもないのに何事に対しても夢中になっているという意味。

イ 落ち着いていられない程の強い関心を示しているという意味。

ウ 相手の勢いに押されてしまったてじろいであるという意味。

エ 自分自身をおさえることができずに怒っているという意味。

オ 話の流れを何とか変えようと必死に抵抗しているという意味。

問二 空らん「②」に入る言葉として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 妙な イ 当たりまえの ウ 安易な エ 苦しきまぎれの オ 難しい

問三 空らん「あ」「い」「う」に入る語の組み合わせとして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で
答えなさい。

ア 「あ」ところが 「い」たしかに 「う」つまり

イ 「あ」だが 「い」なぜなら 「う」いわば

ウ 「あ」ただし 「い」きつと 「う」やはり

エ 「あ」けれど 「い」もつとも 「う」そこで

オ 「あ」たとえば 「い」あきらかに 「う」そして

問四 ―線③「放流しようとしてもうまくいかない」とありますが、なぜですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、
記号で答えなさい。

ア 生命力の強い種類の魚を放流しないと子孫を残すことにきつと無理が生じるから。

イ 川の環境を考えると放流する魚の種類はより多くのものが必要となるはずだから。

ウ 現在の川の環境にあった魚でなければ汚染を浄化することはとてもできないから。

エ 放流する川の環境に適した魚かどうかということが実は一番大きな問題であるから。

オ 一時的に魚を増やしても人々の意識を変えなければ何も変えることはできないから。

問五 ―線④「同じ鮎といっても、その個体には育った歴史がプログラムされている」とありますが、これにはどのような仕組み
が関係していますか。本文中から三字で探し、抜き出さないさい。

問六 ―線⑤「とてもいいことだった」とありますが、何がいいことだったのですか。わかりやすく説明しなさい。

問七 ―線⑥「駄目になっちゃった」とありますが、その意味として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答え
なさい。

ア 遺伝子組み換え技術により造られた大豆は除草剤には強いが生命力が弱くうまく育たなかったということ。

イ 除草剤にも負けない強さを持った大豆はそれ自体が強い毒性をもったものになってしまったということ。

ウ 除草剤を使用しないことにより雑草が生え大豆以外の農作物が育たなくなってしまったということ。

エ 除草剤にも負けない雑草により大豆そのものの成長が妨げられ育たなくなってしまうということ。

オ 大豆だけでなくそれを育てる畑そのものが除草剤にも負けない雑草によって悪くなってしまうということ。

四八 ―線⑦「正解はまだない状況にある」といえるのはなぜですか。「くから」につづく形の一文を本文中から探し、その最初の六字を抜き出しなさい。

四九 ―線⑧「とても気持ちよく領いてくれました」とありますが、彼が領いた理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 説明の中で自分の意見が尊重されていることに気がついたから。
- イ 説明を聞いて自分の意見が反対される理由がよくわかったから。
- ウ 説明がとてもわかりやすいもので川に対する知識がふえたから。
- エ 説明から自分を否定した人に川への愛情があるとわかったから。
- オ 強い言葉で否定されたがその後の丁寧な態度に満足できたから。

問十 ―線⑨「この10年でずいぶん温暖化しました」とありますが、その理由として本文に述べられているものを次のア～オの中からすべて選び、記号で答えなさい。

- ア 多摩川に流されている下水処理水があたたかくなってしまったため。
- イ 川が汚染され汚れてしまい水温を下げる力がなくなってしまったため。
- ウ ダムが造られ下流に水が流れ込むまで時間がかかるようになったため。
- エ 魚の放流を続けたことにより鮎が大量に水中を泳ぐようになったため。
- オ 昔に比べ地球温暖化の影響による高い外気温で川が温められたため。

問十一 ―線⑩「このことが問題だと気づいた」とありますが、筆者が気づいたことの説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 川の水温が急激に上がっていくことによって鮎の成長ぶりに変化が生じ、小さな鮎でも上流に行けるようにダムをもっと減らさなければいけないことに気がついた。
- イ 川の水温が上流と下流で大きく変化することによって鮎の成長が妨げられ、小さいまま産卵するようになり大きな鮎が減ってしまったことに気がついた。
- ウ 川の水温が30℃を超えたことによって鮎が次々と死んでしまい、かろうじて産卵ができた鮎もダムによって海に戻る道がなくなってしまうことに気がついた。
- エ 川の水温が上がることによって産卵の時期が変化し、鮎が小さいままで遡上するので上流にたどりつけず、大型の鮎が育たなくなってしまうことに気がついた。
- オ 川の水温が一定しないことによって鮎の産卵が減少し、そのうえ大きな鮎が海に戻れないような堰が多いため小さな鮎ばかりになってしまったことに気がついた。

問十二 ―線⑪「とにかく上らせてあげよう」とありますが、「とにかく上らせてあげる」とはどういうことですか。本文中に使われている比喩的な表現を用いて、「くこと」につながるように十字以内で答えなさい。

問十三 ―線⑫「言い続けてなんとか動かそうと思っています」の説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 汚染された川をきれいな川にするためには魚だけではなく様々な整備が必要なことを訴え続けて、一日も早く周辺の住民が意識を変え川が汚されないようにしようと考えている。

イ 魚道を造ることにより小さな魚でも遡上できるようにすれば鮎も産卵するようになるということを訴え続けて、国だけではなく自治体すべてに関心をもってもらおうと考えている。

ウ 大きな鮎を増やすためには上りでなく下りの魚道を整えることが必要だと訴え続けて、なかなか理解を示さない国の役人にもわかってもらおうと考えている。

エ 川を元の状態に戻すためには一個人が調査するだけでは駄目であることを訴え続けて、自治体だけでなく国全体を巻き込んだ運動にしていかなければならないと考えている。

オ 大きな魚が下流に戻るような道をつくってやらなければ本当に鮎を復活させることはできないということを訴え続けて、国として対応に乗り出してもらおうと考えている。

三

次の文章を読んで、後の一から十一までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

十月初めの夕方、先生に叱られて残されたクボキを待つて、雑木林に着くのがいつもより遅れた。なんとなく気分を変えたくて、普段は訪れない学校とは逆側の斜面をめざした。

小川を越えたあたりで、林の中に突然広場が開けた。

そいつはあまりに唐突にそこにあつて、ぼくたち全員が同時に息を呑んだ。

当時のぼくらの語彙の中にはそれを正しく言い当てる言葉はなかった。ただ怪しげで秘密結社の本部を連想した。「科学」っぽいなとも思った。

なんのことはない、パラボラアンテナである。

雑木が途切れた広場にぼつんと古い日本家が佇んでいて、庭先にでんと大きなお皿が斜めに空を向いている。空の雫を受け止めるかのように、あつけらかんとその口を広げているのだ。

衛星放送が始まる二十年も前のことだ。ぼくたちはそれが何なのか皆目見当もつかず、ただ興奮した。近づいてみると、銀色の針金で編まれた網のようで、ぼくたち三人の身長を合わせても足りないくらいの口径があつた。それを通して見上げる夕空は、やはり「科学的」で「未来的」に思えた。

「きつと悪者のやで」と言つたのはクボキだ。

「殺人光線かなんか出さんやろか」やつちゃんが不安そうに首を傾げた。

「*NASAの基地かも知れへんで」

「そうやったら、もっと大きいはずや。やつぱり悪者の秘密基地や」

ぼくたちはなんとなく気味悪くなつて、お皿の前から退いた。

一方、建物は古いとはいへ、荒れてはいなかった。無人というわけではなさそうだ。大胆ぶつたクボキが重たそうな木戸の前まで進み、隙間から中をのぞき込んだ。

「げっ！」わざと大げさな声を出す。

「うるさいわ」気の小さいやつちゃんがたしなめた。

「何も見えへん」

クボキが木戸の隙間に顔を付けている間に、①ぼくの目はその上に釘づけられている横長の板に吸い寄せられた。

* 摂知庵。

稚拙な文字で、そうあった。

「せつち、あん」ぼくは声に出して言ってみた。

「え？」とやつちゃんが振り返った。「とおる、何か言うた？」

「表札やろか、あれ」

「なんや、せつちあん、つて、どういう意味や？」

「なんやろなあ……」

やつちゃんとぼくは顔を見合わせた。

ちようど、その時、遠くの小道で*下生えを踏む音が聞こえてきた。

ぼくたち三人は、ぱつと駆け出した。音とは逆の斜面をのぼる方向だった。

走るとまだ癒えきっていない右膝が少しだけ痛かった。ぼくはクボキとやつちゃんについていくことができず、後から息を切らせて追いかけた。

頭の中では、「せつちあん、せつちあん」とその不思議な言葉がぐるぐる回っていた。頭にこびりついて離れそうにない語感だった。

ぼくたちの放課後はスリルに満ちたものになった。

授業が終わるとぼくたちは毎日小走りに裏山を目指した。

そして、お皿と建物を見張る。警察に通報しても取り合ってくれないに決まっている。ぼくたちが悪者たちの尻尾を掴まなければならぬのだ。

少し離れた藪の中に秘密の隠れ家をしつらえた。草の隙間から建物を監視でき、むこうからは相当注意して見ないとわからない。気取られることなくいつかはやつらの動きが捉えられるはずだった。

②果てしない待機も苦痛ではなかった。ぼくたちは「彼ら」がどんなやつらなのか、何を企んでいるのか想像をたくましくすることと時間をやり過ごした。頭の中で彼らは最低でも*デストロン級の世界的犯罪結社になり、ぼくたちはその企みをあばくヒーローへと大飛躍することになるのだった。

「お前の妹な、ごついピアノうまいやろ」とクボキが言った。

「毎日聴いたら、もう飽きるで」

「悪モン、捕まえたら、家に遊びに行ってもええやろか。わしら、悪い友達やつて、おまえんこのおふくろさんに嫌われとるや。でもな、悪モン捕まえたら見直してくれるやんか。遊びに行っても、嫌な顔されへんと思うんや」

たしかにぼくの母親は、クボキたちを毛嫌いしていた。ぼくたちがまるでお互いの傷を舐めあうような後ろ向きの友人であることを、彼女はどこかで察知していた。

【ア】

「ウチに来るのはかまへんけど、なんでや」とぼくは聞いた。

「ピアノ、聴かしてほしいんや」

「ピアノなんかなんも珍しゅうないやん」

ぼくはクボキの物好きに呆れた。妹のピアノが悪者退治の報酬だなんて、どうかしている。

【イ】

正直に言うとはくはピアノを憎んでいた。妹は小学生のピアノコンクール全国大会にも出たことがあり、ぱっとしない長男を差し置いて、身内の注目を集めるヒロインだったからだ。③クボキの言葉も内心快くなかった。

【ウ】

でも、この悪者退治の件では、やっちゃんもかなり変なのだ。

「ケーサツから表彰してもらって、新聞にも名前がでるやろ。それどころか、ジンルイの平和のために闘ったんやから国連で表彰されたり、ノーベル平和賞をもらえるかもしれへん。そしたら、NASAにも認められて宇宙飛行士になれへんやろか。もう月には行かれてもたから、火星に一番乗りを目指すんや……」

まさに捕らぬ狸の「④」。彼はいつでも何かを想像していて、その想像が時々あらぬ方向に飛躍するのだ。

【エ】

クボキとやっちゃんの言葉に耳を傾けながら、ぼくは何度も自問してみた。でも、心の中にはうつすらと霧がかかっていて、自分の望みさえぼくにはよく分からなかった。ただ、「せつちあん、せつちあん」という言葉だけが、まだ頭にこびりつき、ぐるぐる回っていた。

【オ】

敵*アジトの発見から一週間たってちよつとした事件が起きた。

アジトとお皿を取り巻く木製の柵が出来たのだ。

このせいで、ぼくたちの秘密基地からは中が見通せなくなってしまった。また、お皿にもビニールシートが被せられ、外からはそれとは分からなくなった。

「なんか、あやしいで、お皿を隠しよつた」とクボキ。

「こつちのこと気づいたんやろか」とやっちゃん。

「⑤特殊メガネでわかるんかもしれへん。赤外線やエックス線で透視できるんやろ」とぼく。

三人で議論して、ぼくたちは隠れ家を少し遠いところへ変更した。これしきのことであきらめたら、「⑥」はおぼつかない。更に三日後、今度はもつと大きな事件が起きた。週末を挟んで月曜日に訪れると、柵の内側に銀色のドームが出現していた。

これには全員が興奮した。まだ⑦科学と夢を単純に重ね合わせることができた一九六〇年代生まれのぼくたちにとって、銀色は未来の色であり、ドームは未来の構造物だった。*千里の万博にだって、ドイツ館やみどり館などドーム型のパビリオンがいくつもあつた。

もはや秘密の隠れ家から観察しているだけでは我慢できなくなった。

どうしても自制できず、柵のところまで近づいて、中をのぞいた。

ドームのようなものは、思いのほか大きく、直径十メートルはありそうだった。至近距離からだちよつとしたビルのような威圧感でそびえ立っていた。

ただ、材質はとても軽そうだ。風にそよいで表面が小さく波打っているのがわかった。きっとテントのように簡単な構造なのだと思う。

ぼくたちはその形にまだ遠い二十一世紀を重ね見た。⑧悪の秘密結社のことも頭の片隅に迫りやられた。

いったい何なんだろうと口々に言い合った。

NASA説が再浮上して、ぼくとクボキが支持した。

いや、NASAではなくて日本政府が秘密裏に設立した宇宙科学技術研究所のだと、やっちゃんの新説を披露した。そしてそんな議論に熱中するあまり、今度は下生えを踏む音に気がつかなかったのだ。

⑨最初に気づいてしまったのは、やっちゃんだったと思う。

やっちゃんは例によって臆病で勘がいい。ふと振り向いた彼は、声もなく凝固した。クボキとぼくが異状に気づくまでの数秒間、彼はこの世のすべての恐怖をたった一人で背負って震えていた。

「やあ、初めてのお客さんだ」

にこやかな黒縁メガネの男が立っていた。

クボキがふり絞るように言い返した。

「⑩騙されへんで、何か悪いことたくさんどるんやろ」

男はきよんととして、「どうして」と言った。

「秘密結社のアジトに決まっとるやろ」

「秘密結社だって！」彼の口元が緩んで、大きな笑いになって爆発した。

（『せちゃん — 星を聴く人 —』 川端 裕人）

〔注〕

* NASA II アメリカ航空宇宙局。

* 摂知庵 II この作品の登場人物「摂津知雄」が所有する建物の呼び名「摂知庵」のこと。

* 下生え II 木の下に生える低木や草。

* デストロン II 仮面ライダーシリーズに登場する悪の組織。

* アジト II 秘密本部や隠れ家。

* 千里の万博 II 昭和四十五年、大阪府の千里丘陵で開催された日本万国博覧会。

問一 本文からは次の一文が抜けています。戻すのに最も適当な箇所を本文中の「ア」「イ」「オ」の中から一つ選び、記号で答えなさい。

《 》 》 》

問二 — 線①「ぼくの目はその上に釘づけられている横長の板に吸い寄せられた」とありますが、このときの「ぼく」の様子の説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「摂知庵」という不思議な名前では悪者たちの基地という感じがせず、スリル感が失われ困っている。

イ 横長の板に書かれている「摂知庵」という言葉の不思議な語感が新鮮で、気持ちよく受け止めている。

ウ 横長の板に書かれている言葉に不思議に心をひかれ、その意味をなんとかして解き明かそうとしている。

エ 横長の板の用途もそこに書かれている言葉も意味がよくわからないが、なんだか不思議で心をひかれている。

オ 何のために横長の板が釘づけられているのか分からず、不思議に思うと同時に薄気味悪さを覚えている。

問三 — 線②「果てしない待機も苦痛ではなかった」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 警察でさえ見抜けない犯罪結社の存在に自分たちは気づいており、これまでと同じく強い使命感に燃えていたから。

イ 敵を探している時はスリルと緊張の連続であり、時間を意識することはほとんどなかったから。

ウ 敵を監視している間は自分たちのことを悪事を阻止するヒーローのように思いこみ楽しく過ごしていたから。

エ 敵の正体や企みをあばくためには、自分たちがしなければならぬことがまだまだたくさんあったから。

オ 今は笑われている行動だが、見事敵の企みをあばくことができたなら称賛されるにちがいないと思ったから。

問四 — 線③「クボキの言葉も内心快くなかった」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「ぼく」よりも妹のピアノの才能を大切にしていることを知り、友達甲斐のないやつだと腹立たしく思ったから。

イ 「ぼく」がピアノを憎んでいるにもかかわらず、友達は平気でピアノを聴かせてほしいなどと言ってきたから。

ウ 友達までもが妹のピアノの才能に注目しており、「ぼく」はまたしても妹に嫉妬するはめになってしまったから。

エ 「ぼく」たちの勇気ある行動の報酬がピアノ演奏を聴くことだなんて、あまりにも馬鹿げていると思ったから。

オ 音楽の価値を全国大会に出場したかどうかという結果だけで見ようとする友達の感覚がとても貧しく思えたから。

問五 空らん「④」に入る適当な言葉を漢字三字で答えなさい。

問六 — 線⑤「特殊メガネでわかるんかもしれへん」とありますが、ここから「ぼく」は敵をどのような存在と見ていることがわかりますか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 短期間で様々な技術を生み出すことのできる優秀な存在。

イ 科学を悪事に利用しようとしている許しがたい存在。

ウ 子どもの力ではどうても太刀打ちできない恐ろしい存在。

エ 思いもよらないものを発明している正体のわからない存在。

オ 想像以上の高度な科学技術を持っている手ごわい存在。

問七 空らん「⑥」に入る最も適当な言葉を本文中から漢字四字で探し、抜き出さない。

問八 — 線⑦「科学と夢を単純に重ね合わせることはできなかった」とはどういうことですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 科学を学ぶことが自分たちの夢をかなえる近道だと確信することができたということ。

イ 夢にあふれた未来は科学によって切り開かれるのだと、その力を過信したということ。

ウ 科学と夢という言葉は同じ意味を持っているのだと安易に考えたということ。

エ 夢があるからこそ科学は進歩するのだと、ごく自然に思えたということ。

オ 科学によって夢は実現されるのだと素直に信じてきたということ。

問九 — 線⑧「悪の秘密結社のことも頭の片隅に追いやられた」とありますが、このときの「ぼくたち」の様子の説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 敵を監視して悪事を暴くのだとの意気込みを忘れ、未来を思わせる銀色のドームの出現に驚き、魅了されている。

イ 悪の秘密結社と思い監視してきたが、その悪のイメージからドームの未来的なイメージは出てこないと感じている。

ウ 銀色のドームに魅了され、目の前の建物を敵のアジトとした判断が間違っていたのではないかと思っている。

エ 未来を夢見るあまり、悪の秘密結社を監視するという現実の問題がどうでもよい小さいことに思えてきている。

オ まだ見ぬ未来を想像することで、現実の問題がすでに過ぎ去ってしまった出来事のように感じられている。

問十 — 線⑨「最初に気づいてしまったのは、やっちゃんだった」とありますが、「気づいてしまった」と表現していることから読み取れることを説明したものとして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア やっちゃんの勘かんのよさによって夢のある時間が台無しになってしまったということ。

イ よりによって気の小さいやっちゃんが貧乏びんぼうくじをひくはめになってしまったということ。

ウ やっちゃんだけが事件の終わりを告げる場面に立ち会うことになってしまったということ。

エ やっちゃんはいつもびくびくしているからこんな怖い目こわにあつてしまったということ。

オ 当然のことのように臆病おくびょうなやっちゃんがひどい目にあつてしまったということ。

問十一 — 線⑩「騙だまされへんで、何か悪いことたくらんどんやろ」とありますが、このときの「クボキ」の様子の説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 言い負かされたら終わりだと考え必死になって平静さを装いながら言い返している。

イ 恐ろしいけれど今こそ敵の尻尾しっぽをつかむチャンスだと思い期待に胸をふくらませている。

ウ ややもすると自分だけ逃げ出してしまおうとする気持ちに必死に抑えようとしている。

エ 恐怖に耐えながらなんとかしてこのピンチから逃れる方法はないかと考えている。

オ 恐怖を必死にこらえながら勇気を出して事の真相を突き止めようとしている。

✱

得点	※
----	---